

WINDS CAFE 200 in 西荻窪
【200回記念 西脇順三郎『失われた時』再び全編朗読】
川村龍俊（朗読） 井上美明（音）
2013年8月25日（日） 午後2時半開場
トリアギャラリー 東京都杉並区西荻北5-8-5

WINDS CAFE、ついに200回目となります。だからなんだったけどもないのですが（笑）、やっぱりキリのいい数字を見るとなんか仕掛けたくなるのが人間というもの。そこで、今回は、主宰である私自ら企画出演することにしました。というわけで、2005年の100回目に行ったときと同じプログラムを再演いたします。

新味がないって？ いえいえ、そのとき以降、作曲家後藤國彦氏のお誘いで始めた現代詩朗読「目から耳へ」を5回やっておりますし、その間、3,000冊を優に超える詩集を収集し、90人に及ぶ詩人と文通してまいりました。また、主な勤務地が福島県須賀川市になり、震災に遭い、対放射能戦を戦って今日に至っておりますから、多少は人間の中身も変化しているのではないかと思う次第です。

クラシック音楽でも落語でも、同じ演目を何度も取り上げ繰り返していくことは決して妙なことはありませんしね。ただ、前回同様、4部構成の各部を繋ぐ「音」は、盟友井上美明氏にお願いしていますが、彼が前回と同じ方法を用いるかどうかは本番まで私も知りません。これがまた密かな楽しみなんだなあ。いや、実は、前回、思いこみで2箇所読み間違ってしまったのです。そのリベンジがしたくてさあ（笑）。

内容紹介（2005年 WINDS CAFE 100 の告知文より転載）

1982年6月5日は、私にとって特別な意味がある日です。この日、私は敬愛する作曲家、ジョン・ケージと初めて会い、言葉を交わし、サインをもらいました。その同じ日に、敬愛する詩人西脇順三郎が故郷新潟県小千谷市で息をひきとりました。享年88才。

それ以来、ケージファンとしての私は、機会を見つけてケージの音楽を紹介するイベントをいろいろな形で開催してきましたし、彼のレコードをはじめとするコレクションも心がけてきました。一方、西脇ファンとしての私は、全集の読み込みから始まり、関係書籍の収集にこれまたつとめてきました。2000年2月 WINDS CAFE 38【巡礼の人／西脇順三郎に捧ぐ】で、中世音楽団デモンの公演に朗読者として参加させていただいたとき、西脇詩をいくつか読みましたが、そのとき、音声化した西脇詩の魅力を再発見したのでした。

西脇は「私の詩は朗読されると困る。それどころか声を出して読まれても困る」と書いています（『脳髄の日記』）。それは「頭の中で読む音の世界をつくらうとしているから」なのです。この文章は、次の文章を受けて書かれています：「一定の音のリズムの模様で書くことは私は好きではない。更に西脇は「語を選ぶ時は私はその語の概念と共にその語の音をも選ぶ」と書いています。にもかかわらず私は、西脇が「失われた時」を書きながら選んだ「語の音」を自分で聞いてみたいのです。そのため、生前の西脇と親しくされていた新倉俊一氏に、漢字のルビ振りの校訂をお願いし、快く引き受けていただきました。そのことだけでも、今回の企画は意義あるものになると考えています。

今回朗読する「失われた時」（1960年刊行）は、1,500行を超える長詩です。4部構成になっていますが、休憩なしで一気にもうと思っております。おそらく2時間はかかるでしょう。西脇の詩はどれも好きですが、西脇ファンを自認してこのかた23年、もし一番気に入っている詩を決めると問われたなら、この「失われた時」を選ぶでしょう。この公演を機会に、西脇詩に魅力を感じていただける方が一人でもいらっしゃるならば、朗読者として望外の喜びです。あの世の西脇に笑われるかもしれませんが、精一杯つとめますので、どうぞよろしくお願いします。

プログラム・ノオト

「失われた時」は、西脇の本格的な長編詩の一つで、20篇の詩からなり、4部構成になっている。第1篇「失われた時」は、「無限」（1959年9月号）に発表された。「セザンヌ、ピカソ、ジェムズ・ジョイス、ラファエロー」といった人名の間に、多くの草花の名が記されている。また、「大空三昧の女神神話」から「大空の辞」そして「失われた時」へとタイトルが変遷した。最初期に書かれた第2篇は独立した詩篇「起源」として表題を付し、「詩学」（1957年3月号）に発表された。二種の異稿がのこされてあり、推敲の過程が読みとれる。第18篇は雑誌に発表せず、詩集「失われた時」（1960年1月、政治公論社、無限編集部刊）の第3部として書き下ろされた部分。（「没後二十年西脇順三郎展」図録 世田谷文学館 2002 p.24より抜粋）

「失われた時」は、その一部所収の書籍なら、思潮社の現代詩文庫をはじめ、様々な形で今でも入手が可能です。全編は以下に所収されているのみです。

「詩 失われた時」（政治公論社『無限』編集部 1960）
「現代日本名詩集大成 9」（東京創元社 1962）
「西脇順三郎全詩集」（筑摩書房 1963）
「西脇順三郎全集」（全10巻 筑摩書房 1971～1973）
「西脇順三郎 詩と詩論」（全6巻 筑摩書房 1975）
「詩 失われた時」（復刻新装本 無限編集部 1977）
「定本西脇順三郎全詩集」（筑摩書房 1981）
「西脇順三郎全集」（増補版・全11巻・別巻1 1982～1983）
「定本西脇順三郎全集」（全12巻・別巻1 筑摩書房 1993～1994）
「西脇順三郎コレクション」（全6巻 慶應義塾大学出版会 2007）
上記のうち、「西脇順三郎コレクション」の「II 詩集2」は、現在も単巻で購入可能です（定価税別4,800円）。編者の新倉俊一先生によれば、「大学の出版社から出せば、絶版にならずに長く世に出ていると思ったから」慶應義塾出版会刊としたのだそうです。

西脇は「定本西脇順三郎全詩集」刊行にあたって、自分の全詩を校正し、「今後はこれをもって私の詩集の定本にしたいと思う」とあとがきに書いています。今回の朗読は、これを尊重し、「定本西脇順三郎全詩集」の「失われた時」をテキストに選びました。

朗読にあたって、もっとも苦慮するのが漢字の読み方です。「失われた時」本文中にルビが打ってある箇所はわずか2箇所しかありません。そこで、全文ではありませんが、「失われた時」が一部でも掲載されているアンソロジーを探したところ、生前の西脇の弟子のような立場におられた鍵谷幸信氏が編集した以下の3冊に、ある程度のルビが打ってありましたので、まずそれを基本にしました：「西脇順三郎詩集」（白鳳社 1967）、「日本詩人全集 西脇順三郎・尾崎喜八」（新潮社 1967）、「現代教養文庫 西脇順三郎」（社会思想社 1970）。

ところが、どうもこのルビは、鍵谷氏がつけたものらしく、2冊の本の間で矛盾する箇所が2箇所発見されたのです。

「定本西脇順三郎全詩集」「定本西脇順三郎全集」の校訂・校正を行い、西脇とともに「西脇順三郎全詩引喩集成」（筑摩書房 1982）を完成させた新倉俊一氏に、こうした疑問とともに、私が考える読み方をすべて書き送り、通信教育の形で読み方を決定していただきました。現在考え得る、もっとも西脇に沿った読み方が確定したものと信じています。

なお、朗読にあたっては、4部構成の各部と部の間に3回、「音」による中断をさむことにしました（開場時を含めると4回になります）。理由は、あまりに長いので、肉体的に休憩をとりたいことによります。当初はそこまでの詩の中身に照応するような「音楽」をかけようかと思っておりましたが、そうではない音にしたいと思うようになりました。それは、第3部の中に「音は音へと戻つて小鳥の問答と／なる - - 」という箇所を発見したからでした。

新倉氏の「西脇順三郎全詩引喩集成」によれば、この箇所はチャーサーの「小鳥の問答（おそらく、鳥の議会・鳥たちの議会・百鳥の集い、と翻訳されている詩篇）」のことであるとされていますが、私はここに、ジョン・ケージの影をも読みとりました。西脇の書生であった鍵谷幸信氏はまた一方で名うてのケージ・ファンでもありましたが、「失われた時」執筆時においてすでに西脇と鍵谷氏は密接な位置関係で仕事をしていました。この時点ではケージは来日していませんが、吉田秀和や秋山邦晴等の仕事によって、新しい芸術に目ざとい人々には認知されていた可能性があったはず。ましてや鍵谷氏の本職は米詩の研究者だったので、そこで、2005年の初回に引き続き、今回も、30年来の友であり、いくたのケージのイベントでも演奏してもらった、井上美明君に協力を仰ぎました。彼は私を通じて「失われた時」を読み込み、彼の発案による「音」を奏でてくれます。また、彼は初回時の練習や打ち合わせを通じ、ともすれば私が見過ごしてしまったであろう私の癖や思いこみを冷静に看破し忠告してくれました。彼の応援なくしてこの企画は成り立たなかったでしょう。あらためて御礼申し上げます。

最後になりましたが、新倉俊一氏と、家内の幸子、会場を提供してくださった熊谷正子氏、そして本日も来場くださった方々、これまで WINDS CAFE を応援して下さった方々に心より感謝します。

2013年8月25日 川村龍俊

演奏は4回行われる。

最初は朗読開始前。
演奏の始まりが意識されないように
開場時刻より前から演奏を開始する。

あとは朗読の合間。
詩が4つの部分から成るため
各部分の間3箇所において
朗読者と聴き手がひと息つく時間のために。

コンタクトマイクを使用し
電氣的に増幅される音響が用いられる。

2013.8.25 井上美明